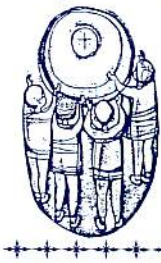
京都教区時報

第78号
発行所
京都市左京区仁王門通新高倉東入
京都カトリック教理センター
広報室（Tel761-9095）
編集責任者　村上透磨
編集部　教理センター
田中司教認可

小教区の頁―丹後大宮教会
特集―四句節教書

平和を祈ろう。
――六月六日国連軍縮会議に向けて



今年六月七日、第二回国連軍縮会議が行われる事は、衆知の事かと思われる。

昨年二月、被爆の地、広島で、小雪の散らつく中で、その寒さをふっとばす様な、熱い血潮をこめて訴えられた平和のアッピールは私達に深い感銘を与えた。

「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死そのものです。」

「過去をふり返る事は将来に対する責任をになうことです。広島市のみなさんは、最初の原子爆弾投下の記念碑を賢明にも平和の記念碑とされました。」

「広島を考えることは、核戦争を拒否することです。」と力強く訴えられました。

この訴えに答えて、昨年12月の臨時司教総会では、この軍縮特別総会に向けて、核兵器完全廃止と軍縮の実現の署名運動の展開と、平和の祈禱日とすることになった。

さて田中司教は、諸宗教担当司教として、これを全宗教団体に呼びかけてはどうかと提案した。（カトリック新聞2月7日号）

然し種々の問題もあり、今回はカトリック内だけで、六月六日を平和の日とし、平和祈願の日と決定した。

田中司教は、そのアッピールの中で、

「若し、この様な祈りの集いのデモに、幼児を手にした主婦や、若者達が加わってくれれば、マスコミ技術の発達した日本からは、直ちにニューヨークに送られ、国連の総会にも少なからざる影響を与える事が出来るのではないかと思います。」と書いている。

唯一の被爆国として、宗教者が一致して、平和のために祈るということは、署名運動以上に大きな影響を与えるであろうということは、国連関係者の意見でもある。

この六・六祈りの集いについての教区としての具体的な計画はおって、司教評議会又はその筋から、発表されることと思うが、社会とともに歩む教会としてのビジョンを打ち出した京都教区としては、この集いが計画されたあかつきには、積極的に参加したいものである。

教皇は平和アッピールの中で次の様に言っていられる。「各国で、数多くのより強力で進歩した兵器が造られ、戦争へ向けて準備が絶え間なく進められています。それは戦争の準備をしたいということであり、準備が整うということは戦争開始が可能だということを意味し、さらにそれは、ある時、どこかで、なんらかの形で誰かが世界破滅の恐るべきメカニズムを発動させるという危険をおかすということです。」

更に教皇は国連大学の講演の中で、私達は道徳的転換、つまり選択の自由という偉大な能力を通じて平和を選ばねばならぬ、人間はそれが出来るのだ、と訴えられている。

教区短信

▽3月20日㈯　聖マリア養護学校卒業式
▽3月21日㈰　世界特別祈禱日（中国教会のため）　アチェス・レジオマリエ
▽3月22日㈪　養護学校聖母の家学園卒業式
▽3月23日㈫　教区幼稚園連盟研修会
▽3月30日㈫　㈳京都カリタス会理事会
▽4月4日㈰　南勢特老創立10周年（枝の主日）
▽4月8日㈭　聖木曜日、聖香油のミサ　教区神学生、教会奉仕者選任式ならびに認定式（主の晩さん）
▽4月9日㈮　聖金曜日（主の受難）
▽4月10日㈯　聖土曜日（復活徹夜祭）
▽4月11日㈰　復活の主日
▽4月18日㈪　伊賀上野堅信
▽4月19日㈪　教区付邦人司祭月例会
▽4月26日㈪　司祭評定例会　教区内男女管区長会
▽4月29日㈭　三重県信徒協集会
▽5月5日㈭　高山右近子ども祭（大和榛原）
▽5月9日㈰　細川ガラシア隠棲四〇〇年祭（味土野・奥丹）
▽5月15日㈯　子羊会合宿
▽5月16日㈰　西陣教会75周年

第三回編集会議要約

三月七日(日)　本紙「京都教区時報」の第三回拡大編集会議が、河原町教会聖堂地下ホールで開催されました。今回の会議は「京都教区ビジョン」に対する時報の役割りを考え、探るために開催されたもので、司教、斉木神父はじめ、各小教区、修道院より9人の担当者、編集スタッフ4名が参集し、熱心な意見交換討議が行なわれました。

編集部では、本会議の成果を、「ビジョン」実践期に入った教区からの、重要な課題として受けとめるとともに、その内容を読者の方々にも知ってもらうことにより、一層の関心・協力・活用を仰ごうとするものです。

以上は、本会議の要約、抜粋です。

〈田中司教挨拶〉

司教就任の半年後、教区時報が復刊されて以来、隔月とは言え、今日まで休みなく続いている。続けていくという事は実に大変であり、今日、事情があって出席できなかった人、陰で働いて頂いた多くの人に感謝したい。

先の「教区一致の集い」は、同じ一つの家族として知り会うよい機会であった。時報が果たしてきた役割も大きく、時代の変化を十分に把握しながら、一層成長していくよう願ってやまない。

〈村上編集長の主旨説明〉

本日の会議の目的は、「ビジョン」実践期を迎えた教区の中にあって、時報の果たすべき役割を考え、探ることにある。忌憚のない意見等を吐露して頂き、時報が持つ使命を果たせるよう、協力をお願いしたい。

〈斉木ビジョン事務局長より、ビジョンの内容等について説明〉

――省　略――

〈議件1　各小教区における「ビジョン」のとらえられ方について〉

○　ビジョンを、どう生きるかが課題。ビジョンに沿った生き方をしている人を探し出し、その輪を広げたい。

○　現在、教会をたて直すことが先決。ビジョンへの取り組みは、四月以降になろう。

○　県下の連絡協議会が近く開かれる。どう取り組んでいくかが、話し合われる予定になっている。

○　現在、信徒にそれほどの積極性は見られない。現段階では、全ての人の考えが一致しているとは思えない。司祭の情熱を中心に、双方の努力が大切と考えている。

○　ビジョンそのものについての理解が第一と思う。ビジョンで言われている事は、決して目新しいものではない。新しい認識の仕方が必要と思う。

○　ビジョンの始まった頃、司牧協で似たような課題にとりくんでおり、とまどいがあって、取り組みを遅らせた。また「自己刷新」などという言葉は異和感がある。ビジョンがきちんとした現状認識に立脚していたかも気になる。

○　世代ごとにギャップがあり、全体としてのビジョンの把握がなされていないように思う。時報にはビジョンに添った実例の紹介を期待したい。

○　ビジョンについては全くの無関心、というのが実態である。司教からの直接のよびかけでもあればと思う。

○　宣言文をミサのあとで読み合った。二ヵ月かかった。時に反感もあった。次回からは実践に向けて話し合う予定である。ビジョンは、誤解を招かないよう十分な理解が必要と思う。とり方によっては、危険な側面のある事も知っておく必要がある。

○　宣言文だけでも読んでもらっているかどうか疑問である。うちの教会ではまだまだというのが実感である。

――議題II「教区時報についての意見の交換」に関しては、次号に掲載の予定です。

ビジョン本文の、第二社会との関わりの中で五項目にわたる注意書きがある。**小山教会**では、日曜日のみことばの祭儀の中で、次の様な**アンケート**を取った。それは、Ⓐ理解度についてで、わかる、余りわからない、わからない、の三つの質問に該当するものに答える。Ⓑその関わり方について、自己評価をしたもので、それを五段階にわけ答えたものである。参考にしていただければ幸いである。

（解答42名・数字は%）

	理解度			自己評価				
	わかった	全くわからない	全くわからない	全くなし(1)	余りなし(2)	普通(3)	ややよく(4)	よく(5)
1．日常生活の中の教会	95.5	4.5	0	76.7	33.3	43.6	12.8	2.6
2．小さい人の中に生きるキリスト	72.4	27.3	0	15.3	17.9	64.1	2.7	0
3．小さい人々の安全な参加と平等	84.0	16.0	0	21.0	34.2	39.4	2.6	2.6
4．アジア・アフリカの兄弟	82.0	13.6	4.5	12.8	46.1	30.9	10.2	0
5．小さい人々から受ける恩恵	70.0	27.0	3.0	21.0	36.8	22.9	10.2	2.6

ニュースとお知らせ

浜尾実氏講演会「明日への心」社会に奉仕する試み（福知山教会）

11月3日、菊香だよう文化の日、浜尾実氏を招いて、文化講演会が開かれた。これは信者数こそ少ないが、信徒が心を合わせ、何か社会に奉仕する一端にもと思い実現されたものである。

氏は「私を選んでくださってありがとうございます」と心よく快諾され、そのユーモアあふれる講演は、そのすがすがしい人柄とあいまって深い感動を与え、200余名の会衆ではあったが、深く感謝された。この会のため皆心を合わせて、努力した事は、信者同志の連帯感を深める上でも大きな力があったと感謝している。

（記事提供者　杉山佳子）

ボーイスカウト・トレーニングキャンプ

CBS京都教区支部では、3月26日～28日「第二回宗教トレーニング・キャンプ」を北白川ビアトール修道院に於て、総指導司祭岡師のもとに開催された。

このキャンプは、教区内の教会に本部を置く、ボーイ・ガール両スカウトに、カトリック者としての自確を換起させると同時に、未信者のスカウトに、キリストとの出会いの場を与えることを願って行われた。スカウトの根本である、神の教えに基いて、宗教的良心に従って行動するスカウト育成が、このキャンプの中で祈りの中に進められた。

長崎からの移動信徒の集い

今年も長崎から、中卒・高卒で就職のため親許を離れ、京都教区へ転入して来る人が26名ある。

2月7日、11日、14日と、下五島、上五島、平戸地区などで移動信徒の集いがもたれ、京都地区からは、担当司祭、滝野師が出席。中卒の17名は、低賃金会社に勤め、定時制で学ぶ人達である。大津、彦根、四日市、宮津等の教会に行く事になる。

家族を離れて、一人で就職する人達は、ビジョンの中に出て来る「弱い立場に置かれている人」の一人である。この人達が、新しい生活の中で、福音の精神を生かすことが出来る様見守ってほしい。

尚、京都教区の連絡事務所は、カトリック京都働く人の家（Tel 075・672・6569）又は、伏見教会（Tel 075・641・0610）の滝野師。

●信徒使徒職養成コース

第13回　みことばと典礼コースI

日時　4月29日 pm 3:00～5月1日 pm 5:00
場所　京都洛星高校宗教研究室
費用　1万2千円
定員　20名

●教理センター録音室開設

簡単な録音室を設置しました。録音したい方はご相談に応じます。

●四句節教書・時報をテープで

四句節教書、並びに教区時報を録音しました。録音テープをお望の方は、教理センター（Tel 075・752・0057又は075・761・9095）に、御注文下さい。実費でおわけいたします。

●「社会とともに歩む教会」勉強会

ビジョン実践のための手助けとして、教会と社会とのかかわり、福音と社会とのかかわり、社会の問題についてイエズス会司牧センターの全面的協力を得て、勉強会を四月より、来年二月まで、毎月開く事になった。

テーマ「平和」　講師　山田経三師

4月18日　「平和と軍縮の問題」
5月9日　「アジアの隣人と私たち」
6月13日　「福音の社会的次元」
7月11日　「世界の飢え」

於・河原町カトリック会館　各 pm 1:00～4:00

西陣教会が七十五周年

西陣教会は、今年創設七十五周年を迎えます。現在、準備委員の手で種々企画が進められているところですが、ぜひ意義ある年にいたしたいと思っております。

この間、五月十六日の記念ミサを中心とする式典及び十月（第三日曜日の予定）の聖体行列は、小教区外にも広く呼びかけることと致しておりますので、どうかよろしくお願い致します。

五月十六日（日）式典予定

75周年記念ミサ　10時～11時半
（司教司式）
祝賀会　12時～1時半
聖体降福式　2時

あなたの良き隣人として
カトリック御葬儀・貸物一式（仏式可）
聖ヨゼフ葬典社
パウロ　杉下安雄
京都市右京区西院寿町23
電話（075）312－7829
（075）771－7577

田中健一司教認可
祈禱書「祈の友」
第4版　P624
発売元 ◇ 宇治カルメル
取扱い ◇ 三条YBU書房
＊修道院直接御注文の際
3部以上　10%
20部以上　20%
50部以上　25%　割引

「現代っ子の信仰教育」
―グリンペイに基づく教会学校教案集―
「ワークブック」
小学1年～6年・各3冊
※お問い合わせは教理センターへ

司教の足どり

一月〜三月

1月

16日　愛徳カルメル会管区長と面談。学連新代表と面談。

17日Ⓗベトナム難民キャンプ感謝の集い。（奈良県御所）

18日　教区付邦人司祭月例会。神学生養成担当者会。

19〜21日　信徒使徒職全国担当者会。（静岡一水庵）　横浜小神・サレジオ中高訪問。

22日　諸宗教委員会。（東京）

23日　ケベック・レデンプトリスト新メンバー来訪。ND小学校代表来訪。韓国人センター代表来訪。（古）

24日Ⓗ教区ビジョン推進相談会（北白川合宿）。教会学校教師会代表と面談。

25日　司祭評定例会。教会一致祈禱週間「アグネス教会」に参加。

26日　浜中氏と面談。

27〜28日　東京都学院司教常任委。司教協常任委。

28日　聖母訪問会代表と面談。R師と面談。（ベト・キャンプ）

30〜31日Ⓗ　聖母被昇天修道院・ドミニコ観想新修道院訪問。母と老司教を見舞う。（聖マルチン病院）

2月

1日　R嬢と面談。

2日　IARF事務総長（スイス）及び佼成会・一灯園代表と面談。

3日　JMPC理事会。（東京）

5日　司祭評常任委。

6日　パイオン修士csv交通事故死。

7日Ⓗ河原町ミサ。26聖人ミサ。（小寺ビル）　M氏来訪。

8日　津教会代表と面談。（古）　パイオン修士遺体表敬。BCCリーダー（ブラジル）と面談。

9日　K氏遺体表敬。

10日　パイオン修士葬儀ミサ。（河原町）　国際宗教同志会総会・講演会。MM管区長と面談。

11日㊗教区修女連総会親睦会。（ND大学）　河原町ヨゼフ会総会懇親会。

12日　西本願寺と面談。神道代表と面談。

13日　大阪聖ヨゼフ会本部訪問。

14日Ⓗ Y師面談。

15日　教区は邦人司祭月例会。

16日　csv管区長と面談。N師見舞。レデンプトール（トロント・ケベック）両管区長と面談。希望の家近火。

17日　教区司祭修道士研修世話人会。大韓国基督南部教会近火見舞。小さい姉妹友愛会訪問。

18日　Y師・A師と面談。

21日Ⓗ女子カルメル会訪問。左大文字保存会に挨拶。

22日　ベルナデッタ卒業ミサ。（聖母）　東山浄苑見学。

23日　松田師理骨式。（衣笠）

24日　ND高校卒業式。教理センター。

25日　駐日バチカン大使館訪問。

25〜26日　司教協機構検討特別委。（東京）

27日　セントヨゼフ卒業式。聖霊会本部訪問。（名古屋）

28日Ⓗ河原町ミサ（四旬節教書）。（古）　O教会代表と面談。

3月

1日　司祭評定例会。

2日　㈶奈良カトリック・評議員会。同理事会。あせび・平城NT見学。

3日　藤堂師入院。（第一日赤）　教理センター。

4日　宮津行。Brミンと面談。

5日　宮津暁星高校卒業式。D師・L師と面談。

7日Ⓗ河原町ミサ。韓国殉教信者修道女会代表と面談。教区時報拡大編集会議。

8日　教区付邦人司祭月例会。csv管区長と面談。

9日　長岡幼稚園司教座聖堂卒園巡礼。（古）

10日　園部聖家族幼稚園司教座卒業巡礼。国際宗教同志会。

11日　ND女子大卒業式。

12日　聖母小学卒業ミサ。（司教座）

13日　新共同体代表と面談。

14日Ⓗ河原町ミサ。

15日　聖母女子短大ミサ卒業式。WCRP平和研究会。（知恩院）

三愛事務機株式会社 社員急募

☆社員募集要項

年齢　男子19歳〜25歳迄

職種　技術社員 5名（技術熟練は大歓迎）

学歴　高校卒業程度以上

待遇　面談の上、賞与年2回

条件　1）司祭又は牧師の推薦状により クリスチャンであること
　　2）履歴書、写真

ご希望の方は、郵便又は電話で本社総務部にご連絡下さい

U-BIX T
□指定紙を使わなくてよい
□バカキのようにピーピできる

主要業種●小西六 U-Bix
ゲステットナー輪転謄写機
トライアンフ・タイプライター
●販売機器のアフターサービス及びオーバーホール

当社は社長以下大多数がクリスチャンである特色ある堅実な会社です。
教会及び教会関係の施設には特別のご奉仕をいたしております。

本　社　〒542 大阪市南区鰐川通3丁目133 新谷ビル　☎(06)252 7818(代) 7817 9
神戸支店　〒650 神戸市中央区海岸通3丁目112-19　☎(078)391-2537
サービス工場　〒558 大阪市住吉区長居1丁目115 14　☎(06)692 6106

特集――一九八二年四旬節司教教書

教区ビジョンの具体化を!!
自己流でなく、聖霊の導きのもとに

京都司教　ライムンド　田中健一

聖なる四旬節を迎えるに当って、教区内の司祭、修道者、神学生、信徒一人ひとりに。特に未来に対して重大な決断をくだし、それを実行する若い世代の信仰の仲間の一人ひとりに。心からの挨拶と祝福の念をこめて、この司教教書をお送りいたします。

＊　＊　＊

教区ビジョンの具体化を一緒に試錯いたしましょう。自己流にではなく、キリストの霊の導きのもとに!!

＊　＊　＊

聖なる四旬節は典礼的には申すに及ばず、聖書的にも宣教司牧的にも重要な期間だと思います。どんなに忙しくても、工夫をこらして、真剣に受けとめ、これと取り組んで行きたいと思います。これは単なる伝統行事ではなく、神の御旨より出る恵みの聖節だと思うからです。

普遍教会の第一の奉仕者ヨハネ・パウロ二世は、昨年二月末、東の果、日本にまで平和の巡礼者としてお越し下さいました。あの四日間の記憶はまだ私たちの脳裏に鮮明であります。教皇さまは私たちに沢山の恵みと実りと宿題を残して急ぎ帰国されました。それはこの聖なる四旬節をご自分の教区で迎えなければならなかったからであります。

その教皇さまは、この一年間、思いもよらない苦しい、長い、病床生活も体験されました。そして今年'82年の四旬節に際しては「私の隣人は誰ですか」と云う書き出しで、あの有名な「善きサマリア人」の譬え話を引用して全世界にメッセージを送られ、私たちの反省、刷新、心の清めを訴えておられます。その詳細はカトリック新聞その他でご存知のことと思います。

＊　＊　＊

さて、恵みとしての信仰を頂いている私たちは、あたかもイスラエルの民が自分たちだけの救いのために選民とされたのではなく、全人類のしるしとなるように選ばれたように、私たちは復活したキリストとの出会い、洗礼を、自分たちだけの安心立命その他のために頂いたものではないと思います。「神はすべての人が救われ、真理を知るに至るを望み

給う」と聖書にあるように、神の救いのみ業の青写真の中にあって、即ち他者との関わりにおいて信仰を頂いていると云う事実を再確認させて頂くことが、何よりも肝要だと私には思われて仕方がありません。

私たちは大して善い子になっておりません。充分回心もしておらず、欠点だらけだと思います。しかし「御子の御父への従順、十字架の死に至るまでの従順」によって私たちを贖い、ゆるし、受け入れ、ご自分の復活生命に結びつけて下さったと云う福音。慈悲深い神。ゆるしの神。その愛が私たち一人ひとりに注がれていることを、日々の祈りと活動の生活の中で必死になって体験させて頂く。これが無条件に重要だと思います。

人類は核軍備のエスカレートによって滅亡の危機にさらされているとも云われます。人類の真の救い、解放はナザレトのイエズス以外からは誰からも保証されておりません。これが私たちの信仰です。従ってミサ中私たちは「主よ、あなたは神の子キリスト、永遠の生命の糧、あなたをおいて、誰のところに行きましょう」と心の底から宣言いたします。又「神と共に築くのでなければ、その労苦は空しい」と聖書は教えています。

若し、この神との一致、結び、つながりを障げるものがあれば、それを取りのぞき、一致、結び、つながりを一層強固にさせて頂くのが、この回心、刷新、清めの聖節、四旬節だと思います。

キリストは「善きサマリア人」を通して私たちの隣人になって下さり、模範を示して下さいました。私たちはどうしたら他人の隣人になり得るでしょうか。これが私たちの真剣に取り組むべき課題、宿題だと思います。

＊　＊　＊

私たち京都教区では、二年半以上も費やして「教区ビジョン」をまとめ、その要約としての宣言文を発表するにまで漕ぎつけることが出来ました。これは教皇さまの訪日を中にはさんで、本当に大きな恵みであったと感謝しております。しかし今からが本番だと思います。

事実、このビジョン作成の過程においては色々なことがありました。決して悪意からではありませんが、反発もあり、拒絶もあり、そして連絡員の名によって九つのグループ群から数回にわたって合宿された方々の中には、初めのうちは不安におそわれ、心配される方もありました。でも京都教区というこの風土において、キリストを中心に一緒に祈り、寝食を共にし、意見を分かち合い、福音の光を現実生活の中で求めて行く時、自分たちが頂いている信仰について自覚を随分変えて頂くことが出来た、と多数の体験者は申しておられました。

ビジョンの内容は特別に事新しいものではなく、第二バチカン公会議の精神に沿って極めて当然、むしろ貧弱なものかも知れません。しかし、それが一人二人のひとによってつくられたものではなく、少くとも50人の方々が直接これに参加して一緒につくり上げて下さったその過程に、このビジョンの尊とさがあると思います。この50人の蔭には何らかの形で、教区民のみなさんがつながっていて下さっていると思うからであります。

＊　＊　＊

しかも、「この教区ビジョン」の底を流れる心と、教皇さまが訴えら

れるメッセージの心とはうまく通じるものが見出せると思います。「社会と共に歩む教会」と云う大テーマのもとに「社会のそれぞれの場で働いておられるキリストを見出して行く」その努力。又「弱い立場におかれている人びと」のことを常に念頭において信仰の仲間同志で、否その輪を広げながら継続的に神の国の実現を学び、支え合って行く努力。大変な課題と思われるかも知れませんが、これがキリストに忠実たらんとする者に、それが出家の身であれ、在家の身であれ、呼びかけられているミッションのキーポイントだと思います。

＊　＊　＊

この場合、一つだけ単純ですが大変むつかしい点を参考までに指摘させて頂きたいと思います。「弱い立場におかれている方々」の一例として、身体障害者のケースを考える時、先づ自分の現場にそのような方が何人いるのかと当然話が出され、「たった一人のためだったら」と云う発想に結ばれてこれが軽ろんじられ得るのではないかと案じます。このような発想はもう少し深く、じっくりと検討を深めなければ、自分たちの知らない同じ立場の人びとに門を閉める結果になるかも知れません。

先日、教区司祭評議会の席上でも、先づ私たちの生活の現場から始まって「弱い立場におかれている人々」とはどんな方々が掲げられるかと検討を開始いたしました。

＊　＊　＊

いずれにいたしましても、私たち京都教区民は大きなスタートを切りました。この至難な'80年代に存在と生命と活動を与え給うた神が、私たちに呼びかけられる荒野の道だと思います。でもその先頭には主キリストが進んでおられます。自己流にあせって道を迷わないよう、見えざる偉大な御者からのみことばに耳を傾けつつ、ゆっくりと、でも立ちとどまらず歩みましょう。私たち日本の教会は「小さな群」ですが、「殉教者の島」と呼ばれてもよい程、すばらしい信仰の先輩を頂いている地方教会であります。殉教者の元后「聖母マリア」も強力な代願者として私たちと一緒に歩んで下さいます。人間の眼にはどんな不可解なことが起っても、復活キリストの信仰はすべてに打ち勝つ信望愛の源であります。

＊　＊　＊

四旬節の過し方も、外面的には随分変って参りました。世界の人類共同体の現状に想いを馳せながら、例年のカリタス・ジャパンが窓口役となっております「四旬節・愛の献金運動」にも寛大な心でご協力をお願いいたします。「あなたたちが、私の兄弟であるこれら最も小さな人びとの一人にしてくれたことは私にしてくれたのである」と復活された御方のお声が響いて参ります。

主における信仰の大切な仲間であるみなさま一人ひとりから平素より示して下さるご協力とご支援に心から感謝しつつ。主イエズス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、順境の時にも逆境の時にも常に豊かでありますように。

ビジョン具体化に向けて

お願い◇あなたの属しておられる共同体で、ビジョン具体化の試みが始められているなら、どんな事でも結構ですので、当時報編集部に御報告下さい。（注宣言文P12）。「知らせる事は愛すること」です。すでに少しずつ報告下さっておりますがその中から今回、奈良信徒協議会議長岩井洋氏のアッピールを掲載したい。

〝奈良県信徒のみなさま〟

三年ごしで、とり組んできた京都教区のビジョンができ上りました。司教様がおっしゃったように「京都教区民が真剣に祈り、聖霊の導きを熱心に乞い求めながら、意見交換を重ねて決意したものであります。そして「このような大目標をかかげるに至ったのは、一人の指導的な立場にある人から出されたものではなく、私達一人一人が平素から教会を思うにつけ考えてきた教会のあるべき姿をまとめたもの」であることに、その意義を見出すべきでありましょう。司教様達が田中司教様に、あなた方もたいした事をやった。古い都である京都教区でこんな新しいことができたということはすばらしいことだ―と大変羨ましがられたそうです。

私達のビジョンづくりの過程で、「教会は常に社会と共に歩むものである」という結論を導き出したのです。この社会と共に歩む教会であることを自覚して、どしようかという反省に到達したのです。

全教区民の声の集約として、このようなビジョンがつくられたことを喜ぶと共に、これからの私達の生き方において、大きな責任を感じます。そして司教様はこう言われます。「これからがとても大切だと思います。それは、このビジョンに従って、いかに具体化させるかという問題が残されているからであります。」そして各小教区、各グループとして、また教区全体として、その具体化をはかるという願いを持っているからであります。そして「福音の心をもって、弱い立場に置かれている人々のことをもっと正しく知り、関わりを深め」ねばなりません。「各小教区、各グループにおいても、これら具体化のための努力を期待します。」と、司教様は言っておられます。

「社会の中にすでに生き、働いておられる主に従って、社会に真の平和と、真の幸福を伝えていく使命が私達に与えられている。」と訴えておられます。

「社会と共に歩む教会づくりを目ざすことを決心いたします。」と言われます。

私達もがんばりましょう。

さて、私達が現に生活している場＝社会、その中で、カトリック信徒としての生きざまについて考えてみましょう。自分だけがカトリック信者だからといって、超越して離れて生きることはできません。しかし又、その中に溺れてしまって、主から離れることもできません。ビジョンは、「社会のそれぞれの場で働いておられるキリストを見出していこう」と訴えます。社会の中に、福音を押しつけるのではなく、社会の中に生きておられるキリスト、殊に弱い立場におられる人々との真剣なかかわりを求めて、同じ仲間として生きること―それこそ、キリストが望んでおられることであることを改めて認識したいと思います。それは教会―神の民の集まり、共同体―が自己刷新しなければなりません。神の民である私達一人ひとりが、「自分を変える勇気」を持たなければなりません。

ところで、ビジョンなど、私に関係ない、とお考えになっておられる方はありませんか。よくお読み下さい。ビジョンは、特別な人向けではありませんし、特殊な人しかできないことを書いたものではありません。信徒の皆がすべきことであり、又誰でもできることです。できないと思う人でも勇気をもって、自分を変えてやってみることです。

「私はすでに、あれこれをしていますから、ビジョンは関係ない」「私にはできないこと、雲の上のこと」と言わないでください。すでに、ビジョンに書かれていることをあなたはしておられるではありませんか。具体的な活動ができない人でも、活動している人が、自分の時間を神に捧げているように活動している人のために、それ相応の時間を捧げて祈ることができます。ビジョンの中に「信仰の根本である神との対話（祈り）を深めましょう」と書かれています。「信徒各自が、真のキリスト者となるよう、一層励むべきであり」ます。又、実践に当って同じ線路の上を、みな同じスピードで走らねばならない」ことはないとも言っておられます。「速く歩ける人」「ゆっくりしか歩けない人」がおられることを、「互いに理解し合い、協力し合う」ことが必要です。

誰もが自分のこととして、すすんで、ビジョンの具体化のために、社会のただ中でかかわり合うすべての人との関係で、キリストを見出し、キリストをあかししながら、生きることだと思います。

特に青少年の諸君に、主体性をもって働いてもらう場を提供していくことを考えましょう。「成人信徒は、青少年の自由な可能性に富んだ主体的な成長を助けるべき」です。そして、青少年と「共にキリストに出会う努力」をしていきましょう。又青少年諸君も「自分自身が、福音の精神をもって、教会に積極的にかかわるよう努力して」いただきたいと思います。そして「まわりで真剣に福音的に生きている人々から学び、主体的に、キリストにおける自己刷新を深めて」ほしいのです。

ビジョンづくりに関係した者の一人として、その作業の過程で強調されたこと、これから特に考えなければならないこと、として話題になったことの一端を以下に参考のために記させていただきました。

これからの私達の教会づくりの一つの方向としてビジョンをよく読み、その精神を把握することによって、具体化実践をはかっていただきたいと思います。

感謝の典礼（中）

前号で感謝の典礼の中心である奉献の祈りの構成を調べました。この祈りについてもう少し考えてみましょう。

二、奉献の祈り（讃美と感謝）〈つづき〉

もともとミサの起源はユダヤの典礼にもとづいています。イエズスキリストはユダヤの過ぎ越しの典礼――会食の典礼の形で最後の晩餐を行なわれ、その中で新しい過ぎ越しとしてご自分の姿を示されました。ですから、ミサ――感謝の祭儀――の本来の意味は会食であり、祭壇は食卓なのです。

過ぎ越しの典礼の中では、食事のはじめにエジプト脱出の物語が語られ、神がどのようにイスラエルの人々を救われたかが想い起こされ、その救いの力が今も働いていることを想い出します。（現在のミサのみことばの典礼に相当するとも言えます）ついで食事に入ると、最初にパンの上になされる讃美と感謝の祈り（ベラカ）があります。人にパンを与え、いつも生命を保ちつづけ、救いに導かれる神への讃美の祈りです。イエズスはこの祈りの中で弟子たちにパンを分かちながら聖体を与えられました。食事の終わりには、ブドー酒の上になされるベラカがありました。イエズスはこの祈りの中で、新しい契約の杯としての御血を弟子たちに与えられたのです。初代教会ではこの伝統を受けついで、ミサをやはり食事の中でやっていたようです。パウロのコリントの教会への手紙の中でその様子がよくうかがわれます。しかしその後、丁度コリントの教会でパウロが戒めているような食事の濫用があったために、食事とミサが分けられていったようですが、ミサが本来、食卓であるという意味は変えられたわけではありません。

4～5世紀頃、教会にとって、アリウス派（キリストが神であることを否定する異端）との戦いが大きな課題でした。

そのため、キリストの神性は非常に強調され、それにつれて御聖体も拝領する（食べる）ことよりも目で見て礼拝するというようになり、聖堂の構造も、食卓としてのテーブルが中央に置かれていた形から、しだいに奥へ退き、10世紀頃は聖堂の奥の壁に押しつけられ、信者は遠くからご聖体を伏し拝むというような形になってしまいました。同時に司祭が個人で捧げる（いわゆる私唱ミサ）ミサの一般化などにより、ミサは共同体全体の行ないというよりも、司祭が捧げ信者があずかるという観念が強くなって来ました。またヘブル人への手紙の（少々誤った）解釈から、旧約の司祭職という考えが導入され、至聖所（15年前までかこいがあったのを憶えていますか）の祭壇で、司祭がいけにえを捧げるというミサの理解が広がると、ますます共同体全体の食卓――会食ということは忘れられて行き、パンの姿も食物というよりは、ウエハースのような、見て美しく保存にも便利なものになって行きました。新しいミサ典礼の総則（一九六九）では、「本当に食物に見えるものでなければならない」（283）としているのはその意味です（現在のホスチア、本当に食物に見えますか？）。

第二バチカン公会議の典礼運動の焦点の一つは、ミサを共同体全体の祭儀にすることと、ご聖体の崇拝の中心がミサ――会食であることをはっきりさせ、正しいご聖体への信心が本来目で見て礼拝することよりも、ミサを共に捧げ、聖体拝領において一つのキリストの生命にあずかり、それを分かち合うことにあることをとり戻そうとする点です。最近、聖体降福式（ベネディクション）や聖体行列の機会が少なくなったのはこのような理由からなのです。特に日本では、多くの非キリスト信者の人々に、ご聖体がご神体であるかのような誤解を受けないように注意しなければならないと思います。

三、交わりの儀

食卓の上になされる讃美の祈り（奉献文）につづいて会食である聖体拝領がつづきます。簡単にその構成を眺めて見ましょう。

イ、**主の祈り**は初代教会からもっとも大切な祈りとされ、特に聖体拝領の準備に一番重要なものとされて来ました。キリストとともに、神を父と呼ぶ喜びを噛みしめながら、聖体をも意味している「日々の糧」を願い、聖体拝領にあたって罪の赦しと、お互いのゆるし合いを祈ります。

ロ、**副文**、主の祈りにつづいて、主の祈りの中の一つの願いをとり上げ、それを更に豊かにして祈ります。昔は司式者がその場に応じて自由に祈っていましたが、現在では「悪から救い給え」の祈りから、「いつくしみ深い父よ、すべての悪から……」という祈りだけが残されています。終わりに全員が「国と力と……」の栄唱で応えます。この栄唱は非常に古い時代に教会が主の祈りの最後に加えたものです。

ハ、**平和の挨拶**　ついで平和のあいさつを行ないます。一つのパンを分かち合う前に信者は平和を願い求めながら、互いにも愛を表わす、非常に長い伝統と深い意味をもつところですが、現在のミサではしばしばシラケやすいところです。平和のあいさつが形式ではなく、もっと自然で心のこもったものになるように工夫しなければならないと思います。

＊小教区の頁＊

丹後大宮教会

丹後大宮教会は、京都府の北部・丹後半島の中央部にあります。今の教会が出来るまでは、口大野地区の民家で、ミサや集会が持たれていました。昭和二十八年秋、各方面からの御協力により、現在地に新聖堂が建設され、来秋は献堂三十週年を迎えるまでになりました。

当時の司祭はキャンベル神父で、同師の美しい聖歌に合わせて、皆が一所懸命に、お祈りを捧げました。

聖歌が最高の祈りである事について、私達信者はよく知っています。葬式の時でも、聖歌を歌って、死者の霊を慰めますが、一般の人の中には、葬式に歌うなんて……と、奇異な感じを持った人もあるようです。一般に歌は嬉しい時や気分の良い時に歌うもの、という考えがあり、聖歌が祈りである事がわからないからだと思います。勿論聖歌も歌の形式をとっていますので、上手に歌うにこした事はないですが、それにこだわると、祈りの本質から離れてしまいます。

昔の話ですが、修道士達が、朝な夕な心からの聖歌による祈りを捧げていましたが、年をとり、上手に歌うことが困難になったので、若い修道士に歌をまかせて、自分達は静かに祈っていました。

宮教説話 27　聖歌による祈り

若い修道士は、美しい声で、上手に、聖歌を歌ったので、主も喜こんで居られると皆思っていましたが、或日「以前のあのすばらしい祈りはどうなったのか？」と言う、主の声が聞こえてきました。修道士は自分達の間違いに気付き、以前のように、心から聖歌を歌い、主を讃美したと言うことです。

聖歌は、心から神を愛し、讃美し、祈りをするという気持が、自然に歌になって現われるものだと思いますので、聖歌は聖歌隊や歌の上手な人にまかせるのでなく、一諸になって、集団の時は勿論、一人で祈る時も、心から聖歌による祈りを捧げることは、信者にとって非常に大切なことだと思います。

藤村嘉彦（大宮教会信徒会長）

間もなく、二代目故ヘネシイ神父に引継がれました。同師は前の神父と違い、歌は上手とは言えませんでしたが、歌が好きで、聖歌隊が結成され、歌ミサを、よく捧げました。この聖歌隊もメンバー減で消えましたが。最近北部三教会で聖歌を歌うグループが出来つつあります。

また当時は自動車が珍らしい頃で、神父様のかなりくたびれたジープで、あちらこちらへ連れていってもらいました。

次のグラビン神父の頃、教会東隣の田圃六百平方米を購入して頂き、信者が総出で、千米程離れた丘から、小さな荷車で、来る日も来る日も、土を運んで、整地作業をやり、そこに、信者達の積立金と、神父様がカナダや会から頂いて来られた金で、立派な信者ホールが建設されました。信者も自分達で出来る事は積極的に手伝いました。教会の十週年の時に、地元の人々にも出席して頂き、祝福されました。

この頃の大宮教会は、結婚後数年の信者が多く、聖堂はチビッ子で満ち、世界一賑やかな教会だと言われました。

その後故キュナティ・西本・近藤・ホーンの各神父様から、数々の御指導を頂き・黙想会・レジオマリエ・隣組活動・他教会との交流等々が行なわれました。

教会の二十周年には、古屋司教による堅信式もあり、近隣各教会からの受堅者を含め、聖堂に入り切れない程でした。

この地方は網野教会を親教会とし、一人の司祭で司牧される、峰山・大宮の三教会で成り立っているので、三教会の合同役員会で共同事業を決めたり、各教会の行事への相互乗入れを相談します。

おもな共同行事は、五月の聖母大会・七月の練成会・十二月の子供のクリスマス会や聖歌・共同使用の物品購入等です。

八代目はメリノール会から、美天久留神父が来られ、従来の修道的司牧と異なる指導に、最初は戸惑いもあったようですが、順応性に富んだ当教会の信者は、すぐになじみ、ミサにあずかる人数も増加し、中学生の活動もあり、教会に活気が満ちていました。また会食を伴なう、ミーティングやミサ後のティーパーティの話し合いの中から、有益な計画が出されたりして、家族的雰囲気が高まって来ました。

教会の二十五周年記念には、思いがけなく、田中司教に来て頂き、信者一同、大喜びで、ミサ後、司教様を囲んで、煙の中で、バーベキュー大会をしました。

その後、この地方の司牧に変革があり、東京管区から、パレ神父が来られる事になりました。

従来教会で行なっていた聖母大会を、ガラシアの里、味土野で実施するように、なりました。昨年は宮津・綾部などからも多数参加され、盛大に出来ました。今年はガラシアの四百年記念で、弥栄町でも何か計画しておられる由、また教区レベルの計画もあるとの事です。

それ等に備えてと言う訳ではありませんが、北部三教会では、周辺の土地を借りて、昨年来信者総出で整備作業に取組んでいます。

今年の聖母大会は五月九日ですので、多くの方の参加を希望します。

私達は聖書研究や練成会などで、自己を高めると共に、このような行事を通じて、御国の拡張を計って行きたいと、思っています。

（藤村）

三度目のカンボジア訪問

12月25日～1月7日

電報。

二度目の訪問の時から話は始まります。私達は、タイ国境に沿った、いくつかのカンボジアの村々で、配給した品物を見回っておりました。その時カンボジア民主国には、人々が祈るための公けの場所が、まだないことに気づきました。

もしリーダーが権利の自由を要求するなら、宗教の自由も尊重されるべきです。私達が村のリーダーにこれを提言したところ、すぐに、そのことに関して何かしましょう、という答えがかえってきました。私達が日本に帰っている間に、小野先生は、西本願寺と知恩院を訪問し、カンボジア民主国に寺を建設するための援助をお願いしました。願いは聞き入れられ、私達の願いが実を結ぶためには、カンボジアからの答えを待つばかりとなりました。

それはクリスマスの日のことです。小野先生と私は、京都から伊丹に向うバスに乗っていました。小野先生が、「シスター、あなたにすばらしいニュースがありますよ」と言って、クメールの首相が、寺の建設を許可したという。キタ・サン・バンさんからの電報を私に手渡たしました。何というクリスマスプレゼントでしょう!! その理に合わない残酷な所業により、まだ戦争で引き裂かれている国へ戻るために、イエズス様は何という大きな勇気を私達の心に持たせて下さったことでしょう。外部の力によって引き起こされた不本意なこの戦争は、言語同断であり、そして私達が、それらの人々に、少しばかりの食料と医薬品を運ばなければならないようにさせた残忍な有様は、私達の心を引き裂き、その後に、ただ涙と怒りと沈黙と祈りだけを残しました。そして私には、他の国々でこの感情を他の国々でもっと換気させねばならないという気持をもたせました。

誰がこの様な苦しみを起こす権利を与えられたのでしょう。全ての人が必要な量の食料と、住む場所と、医療を受けられる様にする力を持つリーダーは、いつ生まれるのでしょうか。確かにその人は「神へのおそれは、知恵の始まりである）ということを知っている人でしょう。

（続く）

シスター・ホーマン（ヌヴェール会）は、しばしば現地を訪れ、難民の窮状を訴え、聖母女学院の生徒の協力を得ながら、募金活動等を続けている。その訪問記を以後数回にわたり記載の予定である。

もぐらの寝言

他宗教的な習俗の中で

やっと社会復帰のかなった？もぐらは思う。

長男が少林寺拳法を始める事になって入門式に立ち会った。驚いたことに、武道とばかり考えていた少林寺拳法は、実は宗教であり、拳法は金剛禅の修業の一部であるとの事であった。長男のために精神と肉体のバランスのとれた強さを求めていた私は、親子ともどもカトリック信徒を名乗りつつ修業を続けさせるつもりでいる。目下のところ格別の支障はないものの、この矛盾をどうするべきか。

四、五日前、ある工事現場の建築主に頼まれて八坂神社にお参りに行った。彼女（建築主）は、なぐられたような頭痛の原因を、敷地鬼門の浄めとお参りが不足したためと考えており、その代行を私に頼んだのであった。八坂神社の病除け用の神様の前で、鈴を鳴らし、十字を切る私を見ていたおばさんの目は、まんまるであったが、それよりもっとおもしろいのは、くだんの建築主が待ちうけていたように電話をよこし、頭痛がおさまったと、私に電話をくれた事であった。

もっとも、建物を新築する場合の慣例として、十人のうち九人までが「地鎮祭」といった儀式をする。この地鎮祭も仏式や、創価学会方式等の他種々あるものの、やはり十人のうち九人までが、神式を望む。我々はその都度、神妙な顔で玉串の奉献をなし、二礼二拍一礼を型通りにすすめるのである。慣れのお陰できっと私は熱心な神道信者に見えるに違いない。

昨年の暮に私は四十才の誕生日を迎えた。正月には能登半島の田舎へ両親の顔を見に帰るのを慣例としているが、京都では拒み続けたものマザーコンプレックスの固まりのような私は、母の強いての勧め（命令？）に逆う事はできず、かっての友人達と共に厄年用の深夜のおはらいに参列した。

この現実、読者諸君はどの様に考えられるだろうか。一度聞いてみたい。（き）

ひとこと

科学が発達し合理化の進んだ現代にも人間の魂は、目に見えないものへの信仰心というものを捨て去ることはできないものなのですね。確かな宗教を持たないという日本人も人生の節々で、隠くれた信仰心を見せてくれます。宗教とは、そうした信仰心を養育していくものだと思います。（R・K）

昔、こういうことに不純なものを感じたものですが、―諸宗教との対話が論じられる今、私自身も、諸宗教の中で働いておられる聖霊の導きを感じとっています。お寺の鐘の音が心にしみこんだり、お経の言葉の意味の深さを味わったり、しかし他宗教にふれる程、カトリックの素晴らしさを思います。（F）

社会と共に歩む人物記(2)

特別 聖体奉仕者として

伏見教会　松尾昭三

――不思議な事なんですけれど、松尾さんにはだいぶ前からお目にかかっていましたけれど、身体障害者だったって、後で気が付きました。松尾さんは、全然そういう雰囲気を持っていらっしゃらないですね。――

そうですか、やっぱり、私自身もあまり身体障害者だっていう意識はありません。僕は自動車の販売会社に勤めているんですが、職場の経営者や同僚が、全く不具者扱いをしないで、受け入れて来てくれたからだと思います。例えば重たいもんでも、私がかついでいても見て見ん振りしてるもん。

――なるほど。――

一緒にして考えてくれてる。だから私の人生観では、障害者としての気持ちの上での差別が全然なかったですね。

――そういう風な環境に恵まれたっていうことは、ひっくり返せば、松尾さんが素晴らしいものを持っていらっしゃると言えるんじゃないですか。あなたがさっきの「みことばと典礼」のお説教の中で、自分の置かれた立場で挑戦していくとおっしゃった様に。それで松尾さんは何時、受洗なさったのですか？――

小学校の六年生の時、急性骨髄炎にかかり、入院し、それから十五才の時、さらに関節炎になって足を切断して、それから、二十歳の頃誘われてYMCAの聖書研究に出るようになりました。そして、スタインバック神父様の公教要理を習い、終戦後、昭和二十三年、二十一歳の時に洗礼を受けました。

――ああ、そうですか。それで結婚なさって子供さんは何人ですか？――

男の子が二人います。子供には幼児洗礼を授けましたけれど、暫く長い間教会を離れていました。

――それは何時頃ですか？――

子供が高校生の頃です。丁度反抗期の頃でしたが、或日、子供が書いたアウグスチヌスのレポートを読んで感心した。僕はアウグスチヌスがどんな聖人だったか知らなかったので、その時、僕自身もっと子供たちと一緒になって勉強せんとあかんなあと思いました。子供に大事な信仰を伝えていく為にも、まず教えるというより、一緒に勉強していくということが大切なんじゃないかなと思いました。その頃、三朗神父さんにお会いすることができたわけで、

――ああ、なるほど、いい時にいい先生に出会ったということですね。――

そうです。子供に私の気持ちをわかってもらうちゅうのは、やっぱ、子供の気持ちがわからにゃいかん。そして色々とあり自らの信者としての今までの感じ方と、これからのあるべき姿が、又、そこでわかってきてね。子供もキリスト者、そして私も同じキリスト者。そういう同じ信仰について話し合うことができるように、一緒に勉強して行くっちゅうことが大切なんじゃないかな。

――そうね。それが家庭っていう社会との関わりになるわけね。で、会社の方々との関わり方はどう思われますか？――

職場では自分の子供よりもっと年下の子と一緒に仕事をしているんですが、子供と接する時に、一人の人間として見ていくっていう努力をしていますが、それと同じ事が職場においても言えます。自分の知っているものは何でも吸収して下さい。だから自分の足らんとこは助けてやっていうような感じでね。そういう面では若い人たちからも何やかんや相談を受けています。

――そうですか。それでは最後に、松尾さんの伏見教会に対するヴィジョンを聞かせて下さい。

伏見教会は、立派な御聖堂と聖母のシスターたちの援助に支えられていますが、規模が大き過ぎて、教会内だけでの行事に追われているような気がします。だからもっと社会の立場で奉仕しながら、色んな典礼を教会の中へ持ち込んで、お互いに分かちあって、励ましたり助けたりしていく集会ができたらと思います。色んな行事を教会内でするのではなく、社会の人たちとやりたい。信仰を持たない人たちと共に何かをやっていきたいですね。

南心

時報が対話の手段ならば「互いに心を開けあおう」書く者も読む者も、投稿者も編集者も。

◆久し振りに編集部に参加すると、そこには「教区ヴィジョン」があった。編集スタッフの様々な環境の変化にも拘らず依然として「時報」の線路は続く（き）

◆邦人司祭平均年令52才、その司祭達の体に疲れが見えはじめて、病に倒れる人が多くなった。精神ははやれども肉体は弱し、稔り入れは多けれど働く人は少し。故に私達は何をしなければならないのだろう。健康を祈ります。（MT）

◆ビジョンが出来て、何とかしなければいけないという気持になっているけれど何とかみんなで、聖霊の導きをいただきたいものだ。何とかみんなで、聖霊の導きをいただきながら、復活したキリストについていきたい。（Y）

◆人それぞれに〝春の花〟があると思います。その花を見ると春だな、と感じる花。ボクにとっては、木蓮が春の花です。四年前、四国路で見たこの花が、想い出と共に春の花に育っていきました。（亜）

◆みなさま読んでいただけました？活字を穴にうめる事に専念したような時報になってしまって……何故そうなったかって？　いろいろ理由があって。**でもお願い。読んでください！　ありがとう。**

本紙を福音宣教に役立たせるため、ご近所、お友だちにもお見せ下さい。